

摩多羅神の顕現とその芸能

中村茂子

はじめに

- 一 茨城県桜川市 楽法寺のマダラ鬼神祭
 - 1 八年ぶりに復活したマダラ鬼神祭
 - 2 楽法寺とマダラ鬼神祭の伝承
 - 二 京都市右京区太秦 広隆寺の牛祭り
 - 1 広隆寺境内社・大避神社おおさけ牛祭りの概要
 - 2 大避大明神・秦河勝・摩多羅神・宿神・翁面（鬼面）
 - 三 岩手県西磐井郡平泉町 毛越寺の延年
 - 1 毛越寺常行堂修正会延年の概要
 - 2 摩多羅神の顕現と芸能
- おわりに

はじめに

摩多羅神は、天台系寺院の常行三昧堂に密かに祀られた念仏の守護神、また、玄旨帰命壇の本尊ともされている。この外来神は慈覚

大師円仁（七九四～八六四）が唐より帰朝の際に顕現したと伝えられ、また、恵心僧都源信（九四二～一〇一七）が念仏の守護神として勧請したともいわれている。服部幸雄「後戸の神」によれば、摩多羅神の像として知られているものに次の五種類があるという¹⁾。

① 叡山の真如堂実藏坊藏 絹本著色 長さ三尺、幅一尺半ほどの軸物。上杉文秀の図柄解説を整理して記すと、烏帽子狩衣様の俗人の服で、中央上位に描かれた摩多羅神は口の上下に髭があり、静止して鼓を打つ。下位に舞姿の二人が描かれ、向かって右側は口上に髭があり、左手に竹枝、右手に杓を持つ。左側は髭なし、左手に鼓を持ち、右手で打とうとしている。下位の二人は童男女ではなく、また星の図柄も描かれていない。

② 中邑祐久藏 図柄は①本とほぼ同じであるが、舞っている二童子が茗荷と笹の小枝を持ち、画面上位に北斗七星が描かれている。

③ 『塩尻』（卷之三十五）に写されているもの ②本とほぼ同じであるが、上位北斗七星の下に雲気を描き、その下右側に茗荷、左

側に竹を描いている。また、摩多羅神が左手に抱く鼓が極端に大きい。

④ 叡山西塔の椿堂脇壇で発見された像 高さ六寸余の木彫一軀で、童子像なし。両手首を失っているため、鼓の有無は不明。

⑤ 毛越寺大乘院に伝えられた画像 図柄は①本に似ている。

「後戸の神」に次ぐ服部幸雄「宿神論」によって、寺院の後戸に祀られる神（摩多羅神）の神秘性と芸能との結びつき、すなわち宿神⇨摩多羅神⇨翁面（鬼面）という猿楽起源説への展開が提示され、以後、翁猿楽の成立に関して後戸と関連した成果が知られている。また、山本ひろ子「摩多羅神の姿態変換―修行・芸能・秘儀」によれば、摩多羅神には、歌舞に関わる芸能神、常行三昧堂の道場神、玄旨婦命壇の本尊という三つの役割を認めることができるという。

筆者は二〇〇八年四月一三日、茨城県桜川市雨引山楽法寺（通称雨引観音・真言宗豊山派）で、八年ぶりに実施されたマダラ鬼神祭を見る機会に恵まれた。インターネットで検索したこの祭りについての記載には、京都太秦の広隆寺（真言宗）に伝承されている「牛祭り」と共に、「日本二大鬼祭り」であることが記されていた。摩多羅神が人々の前に顕現し、眷属などとともに寺院周辺地域を行道した後に祭文を読み（京都広隆寺）、鬼踊りを演じる（茨城楽法寺）祭りが、「鬼神祭」として伝承されている。その一方で、天台系寺院には、常行堂の後戸に祀られている摩多羅神を本尊として実施される修正会の延年が伝承されている。本論

では、この両者間にみられる芸能神としての摩多羅神の顕現の方法、および摩多羅神が実際に演じてみせる芸能・芸能的な共通点等について追求してみたい。

一 茨城県桜川市 楽法寺のマダラ鬼神祭

1 八年ぶりに復活したマダラ鬼神祭

茨城県桜川市本木の雨引山楽法寺阿弥陀院（真言宗豊山派）に伝承されているマダラ鬼神祭は、例年四月第一日曜・または一月三日に行われてきたが、平成二〇年の祭りは七年の中断を経て、四月一三日の第二日曜に八年ぶりに実施された。この日はあいにくの小雨模様であったが、予定通り午前十一時に太鼓と法螺貝の音を合図に「あまびき老人福祉センター」前の広場でマダラ鬼神を中心とした行列を整え、雨引山（標高四〇九メートル）の中腹にある観音堂前に向かって行列をくり出した。行列次第は以下の通りである。

①会奉行 ②マダラ鬼神（くすんだ赤色鬼面・白赤熊を被り、赤上下の装束に紫の袈裟を着け、白馬に乗る） ③眷属の五鬼（赤・白・青・黒・黄の各色の鬼面、手拭いを被る、白上下装束を着け、点火してない松明を持つ） ④旗持ち・楽人など ⑤大傘を差し掛けられた導師、以下数名の僧侶 ⑥稚児二〇名程（保護者つき） ⑦寺侍（袴姿の檀家の人々）多数。

午前十一時一〇分、行列は薬医門（慶長四年八一五九九）に真壁城の大手門を寄進されたものという）前の石段下に到着、石段に

添って点在する鐘楼・仁王門・六角堂の前を白馬にまたがったマダラ鬼神が先頭をきつて一気に通り抜けた後、行列がゆっくりと観音堂脇、多宝塔前に設置された白衣観音（東京世田谷講中の寄進）前に準備された野天護摩場のてんごまじょうに到着した。それぞれが所定の位置に着いたのは午前一一時二〇分頃であった。柴燈護摩壇の表面に位置して立った導師、副導師を中心とした数名の僧侶以外は、行列に加わった稚児と保護者が多宝塔の回廊、寺侍が観音堂の回廊から野天護摩場を見下ろす形で儀式が始まった。導師が柴燈護摩壇の前に進んで種々の呪法を繰り返した後、一一時三〇分頃、当役の僧侶が柴燈護摩に点火した。それを合図に行列到着以後は姿が見えなかったマダラ鬼神を先頭に、眷属の五鬼がそれぞれ背に鞆ゆきを負って観音堂と白衣観音の間から野天護摩場へ入場してきた。柴燈護摩壇の奥に祀られた白衣観音前にも祭壇が設置され、柴燈護摩壇の表面中央に立つ導師の左側へマダラ鬼神と五鬼が柴燈護摩壇を囲む形で居並ぶ。導師の右側には楽（鉦でとめた太鼓・拍子木）と般若心経を唱える僧侶各三名が所定の位置に着く。楽入りの般若心経が始まると、マダラ鬼神と五鬼は点火しない松明を振り回しながら柴燈護摩壇のまわりを順まわりに囲む状態で約二分ほど踊る（マイクによる僧侶の説明では、鎌で木を切る様子を表現しているという）。般若心経読誦が続き、柴燈護摩壇を囲んでマダラ鬼神を中央に五鬼が立ちつくす中、僧侶が奉賛会や講中などの奉納した護摩木を何度かに分けて護摩火の中へ投下する。

午前一一時四〇分、般若心経読誦を終了し、導師を先頭に数名の

僧侶は野天護摩場を退出。野天護摩場に残ったマダラ鬼神と五鬼は、護摩火の近くに寄って手にしていた松明に護摩火を移す。六鬼は松明を振り回し、叫び声を発しながら護摩壇のまわりを順回りに踊る。五分ほど踊って終わり際に六鬼は、消えかかった柴燈護摩火の周囲から残り火のある松明を掲げ、弓を構えて四方へ矢を射る仕種をして見せ、マダラ鬼神を先頭にして退出する。この時を待ちかまえていた参詣人が競って野天護摩場へなだれ込み、火が消えてくすぶっている柴燈護摩の煙を体に浴びる。

午前一一時五〇分、松明にかえて大弓を持って観音堂の回廊に姿を現した六鬼は、回廊で護摩場を見下していた寺侍に代わって回廊前面の欄干に片足をかけ、太鼓の音を合図に参詣人に向かって破魔矢を射る。参詣人は争ってこれを奪い合う。最後に四九本目の矢をマダラ鬼神が射終わると、六鬼は回廊から姿を消す。破魔矢を得ることができた参詣人は、その年の無病息災が約束されると伝えられている。六鬼に代わって袴姿の寺侍たちが再度回廊の前面に出て、参詣人に向かって祝いの餅投げをする。六鬼の弓射と寺侍の餅投げは約一〇分間の行事で、ちょうど正午に祭りは終了した。参詣人は潮が引くように境内から姿を消した。

正午、多宝塔に向かって左側に位置する客殿には、遠隔地から来た雨引観音講中の人々、および奉賛会（檀家総代以下の役員・地域の有力者など）の人々のために昼食が準備されていた。この日参詣した講中は、出島（茨城県潮来市）講中（八〇名）、東京の世田谷講中（五六名）、下館（茨城県筑西市）講中（六名）であり、出島

講中の場合、弁当を持参して地元でとれた野菜などで汁物を作ってもらうのが習慣であるという。

本年の鬼役を務めたのは、次の通りである。

護摩場のマダラ鬼神（樂法寺僧侶の佐藤宏仁・四〇歳代・中断以前に何回か務めた）・行列乗馬のマダラ鬼神（近隣乗馬クラブのオーナー・白馬と共に寺の依頼を受けて参加した）・白鬼（蛭澤清・昭和五四年生・本木在住・初役・祖父と父三代にわたって鬼役を務めてきた）・赤鬼（中川泰幸・昭和三七年生・鬼役三回目・本木在住）・黄鬼（利根川 悟・昭和三三年生・初役・本木在住）・青鬼（蛭澤 弘・昭和四八年生・初役・本木在住）・黒鬼（中川浩明・昭和四六年生・初役・本木在住）。彼らの稽古は、前日のリハーサルを含めて三回行ったという。

最後に樂法寺の事務長・宇留野聖澄師にインタビューを行い、以下のようなことを伺った。平成一三年から七年間の中断の最大の理由は、駐車場が整備されていなかったことであり、平成二〇年に八年ぶりに復活できたのは駐車場を完備したこと、旧西茨城郡大和村が平成一七年一〇月一日に岩瀬町・真壁町と共に合併し、桜川市になったことを祝う意味が大きいという。東京の世田谷講中は、例年一一月三日にマダラ鬼神祭に合わせて野天護摩供に参詣してきたが、平成二〇年四月の祭りに参詣したい希望があつて実現した。また、中断していた七年間も世田谷講中は例年通りにマダラ鬼神祭の日に野天護摩供に参詣してきた。出島講中と下館講中は正月に実施される堂内での護摩供に参詣してきたが、今年は野天護摩供に参詣

したいという希望で実現した。今年マダラ鬼神祭に参詣した講中の他にも、川口講中（八〇名）が存在する。来年以後、マダラ鬼神祭を実施するか否かは現在のところ不明であるという。その理由は、マダラ鬼神が乗馬で行列に参加することがメインの祭りであり、馬と一緒にプロの乗馬者を依頼するための経費が捻出できるか否かが、毎年実施できるかどうかを決定するという。

2 樂法寺とマダラ鬼神祭の伝承

雨引山樂法寺阿弥陀院は真言宗豊山派に属し、開山は六世紀末に梁（中国）から来日した法輪独守居士によると伝えられている。本尊は延命観世音菩薩であり、板東三十三ヶ所霊場の二十四番札所として知られている。寺崎大貴「雨引山樂法寺について」によれば、明治初期提出の由緒書写し等には、推古天皇が当寺の延命観音に病氣平癒祈願の成就によって、勅願所として小瓦の地に伽藍を造営されることになったという⁴。また、「宥円附属状抜書」には、樂法寺の前身は小瓦山樂法寺阿弥陀（ママ）と雨引山延命寺地藏院という二つの寺院であつたようだが、縁起類では当初から一つの寺院として記されているという。さらに、光明皇后が安産、子育ての祈願所として三重塔を建立し、弘仁年間（八一〇〜八二四）嵯峨天皇の勅願によって本尊の大修理を行い、干天に悩む人々に対して般若心経を書写して奉納した効験によって雨が降ったことから、山号を雨引山と命名した。建武三年（一三三六）足利尊氏が寺領を寄進し、厄除け開運を祈願して幕府を開き、慶長九年（一六〇一）徳川家康

が寺領一五〇石を寄進して幕府の安泰を祈願したという。

マダラ鬼神祭に関する伝説は、以下のような内容が伝えられている。文明四年（一四七二）（応永三年（一三九六）とも）、戦火によって焼失した本堂などを馬に乗って出現したマダラ鬼神が、眷属の鬼を大勢駆使して七日七夜で本堂を建立した。その完成祝いとして、夜に鬼たちが火を囲んで円を作り、太鼓の音に合わせて鬼踊りをしたという。マダラ鬼神祭は、寛永一八年（一六四一）当時の住職であった尊海が、老中松平伊豆守信綱の舍弟であった縁で幕府に願い出て許可され、同年三月より年中行事として実施してきたもので、マダラ鬼神祭を始めるに際し、信綱が寄進した袈裟は現在に伝えられており、祭礼当日マダラ鬼神が身につけているものであるという。

次に、インターネットに記載されていた「日本二大鬼祭り」というもう一つの伝承、京都市太秦広隆寺の「牛祭り」について、記してみよう。

二 京都市右京区太秦 広隆寺の牛祭り

1 広隆寺境内社・大避神社牛祭りの概要

広隆寺の牛祭りとして知られているこの祭りは、以下のような次第で行われている。牛祭りは、境内社の一つである大避神社の祭りとして例年一〇月一〇日（かつて、九月一二日）に行われている。当日の午後九時頃から金棒・各町から出される御神灯・囃子方（太

鼓・竹を鳴らす）・袴姿の神事奉行・松明・五大尊と称される赤鬼と青鬼（各二人が大きな紙面と紙冠をつけ、銀紙を貼った三叉鉾を持つ）、および摩多羅神（白狩衣・白紙面をつけ、頭には「だし」と称する紙毛をつけた冠を被り、黒牛に乗る）という順序で広隆寺の西門から行列をくり出す。寺の周辺を練り歩いたのちに、再度東門から広隆寺境内に入る。行列は祖師堂前の拜殿に至り、四天王が拜殿の四角に立つと、摩多羅神は牛から下りて拜殿を三周したのち、段を登り祖師堂に向かって腰を下ろし、以下のような祭文を読み上げる。

「それ おもんみ 以 れば 姓 を 乾坤 の 氣 に うけ、徳 を 陰陽 の 間 に 保ち、信 を 専らにして仏につかへ、慎み を いたして神を敬ふ。天尊地卑の礼をしり、是非得失の品 を 弁 ふる。これひとへに明神の広恩なり。これによつて単微 の 幣帛 を ささげ、敬して摩吒羅神に奏上す。あに神の恩を蒙らざるべけんや。これによつて四番 の 大衆等、一心懇切 を 抽 んで 十抄の儀式 を まなび、万人の逸興 を 催す をもつて、おのづから神明の法楽 に 備へ、諸衆の感歎 を なす をもつて、暗に神の納受 を しらんと なり。しかる間、さいづち 頭 に 木冠 を 戴き、くはび羅 足 に 旧鼻高 を からげつけ、からめ牛 に 鞆 を 置き、大閻 を すりむいて かなしむ もあり。やさ馬 に 鈴 を つけて を ざる もあり、はねる もあり。ひとへに百鬼夜行 に 異ならず。かくのごとく等 の 振舞 ひ をもつて、摩吒羅神 を 敬祭 し 奉ること、ひとへに天下安穩、寺家安泰のためなり。これによりて永く遠く払ひ退くべきものなり。まづは三面の僧坊 の中 に のび入りて、物取る銭盗人 め、奇怪、すはいふは

いや小童ども、木々のなりもの取らんとて、あかり障子打ち破る、骨なき法師頭もあやふくぞ覚ゆる。さてはあた腹、頓病、すはぶき、疔瘡、ようさう、間風。ことには尻瘡、虫かさ、濃瘡、あふみ瘡、冬に向かへる大あかがり、ならびにひびい、がひ病〔咳〕、鼻たり、おこり心地、くつち、さはり、伝屍病、しかのみならず鐘楼・法華堂のかわづるみ、讒言仲人、いさかひ合ひの中間言、貧苦男の入りたけり、無能女の隣ありき、または堂塔の檜皮喰ひぬく大烏・小烏め、聖教やぶる大鼠・小鼠め、田の畝うがつうごろもち。かくのごときの奴原において、永く遠く根の国、その国まではらひしりぞくべきものなり。敬つて白す 謹上再拜⁷。

この祭文を読み上げる摩多羅神は奇妙な節を付け、一句ごとに四天王（赤鬼・青鬼各二）が唱和する。参詣人はその読み方に対して、さまざまに悪口をいう「悪態祭り」の形式を伝えている。摩多羅神と四天王は、祭文を読み終わると堂内に飛び込んで祭りを終了するが、かつては厄をのがれるとあって、参詣人が摩多羅神と四天王がつけた紙の仮面を争って奪い取ったという。祭文の内容から、かつて摩多羅神以外の四天王の中には、馬に乗って行列に参加した者もいたようである。次に、先に記した「マダラ鬼神祭」についてインターネットに記された文言「日本二大鬼祭り」と称する理由を理解するために、両者の共通点と差異点をあげてみよう。①③は共通点であり④⑤は差異点といえよう。

- ① 摩多羅神が眷属の鬼を従えて参詣人の前に顕現する。
- ② 摩多羅神（僧が務める）を除く眷属の鬼役は、寺院所在地在住

の在家の人々が務めている。

- ③ 馬・または牛に乗った摩多羅神を中心にして、大勢の地域住民が参加した行列を組み、地域内を練ったのちに寺院の本尊前に至り、護摩供養・鬼踊り・楽入り般若心経（以上楽法寺）祭文を読む（広隆寺）。

- ④ 「マダラ鬼神祭」の場合は、僧の護摩供養に続いてマダラ鬼神を中心とした呪術的な所作の鬼踊りと破魔矢を射ることで、除災招副など現世利益的な祈願とする。

- ⑤ 「牛祭り」の場合は、寺の本尊に向かって摩多羅神と四天王が砕けた内容の祭文におどけた節をつけて読みあげることで参詣人の悪態を誘い出し、参詣人に紙の仮面を奪われ、これを門口などに貼り付けておくことで除災招福、現世利益の祈願とする。

2 大避大明神・秦河勝・摩多羅神・宿神・翁面（鬼面）

広隆寺は現在真言宗の寺院で、西暦六〇三年に秦河勝が聖徳太子から授かった仏像を安置するため建立したと伝えられている。服部幸雄「宿神論」（上）によれば、広隆寺牛祭りとして知られている祭りに際して、牛に乗って出現する摩多羅神は、広隆寺境内社である大避神社祭神の大避大明神であり、すなわち秦河勝であるという。また、大避大明神は外来神であり障礙神でもあるが、正史に見られる秦河勝には御霊神、芸能神としての記録は全く見られない。正史にない秦河勝の二つの性格、すなわち「軍のまつり人」「芸能者（六十六番の物まねを伝えた人）」「猿楽の創始者」を付加し、伝

説化して伝えたのは、秦氏の後裔を自称する大和猿楽者であるという。そのことは世阿弥の『風姿花伝』（神儀）や世阿弥の娘婿・金春禅竹の『明宿集』などによって明らかであり、秦河勝より伝来と伝えている重代の面は、翁面と一体に観念される鬼面であるという。さらに、服部幸雄「宿神論」（下）によれば、猿楽者の伝承による限り、秦河勝を神格化して祀った大遯大明神を彼らの守護神¹¹宿神として、その実体は天台系寺院常行堂の後戸の神・摩多羅神であるとした¹⁰。服部幸雄は摩多羅神と猿楽者の関係を修正会、修二会に行われた呪師猿楽を媒介として理解できるといいますが、一方で、宿神および翁面については、山路興造「翁猿楽考」によれば、次のような指摘がなされている。「大和猿楽の徒が、翁面を宿神として祀ったことは、服部幸雄氏の「宿神論」などでよく知られている。はたして猿楽者の祀る宿神と非人宿の宿神とが同一の神であるかどうかは、若干問題のあるところであるが（以下略）」と記された上で、後戸の神・摩多羅神については、史料に見られる日光輪王寺修正会および大和多武峰常行堂修正会の例をあげ、摩多羅神を迎えて芸能を演じるのは三日目と五日目の顕夜で、翁猿楽・田楽などが演じられたこと、さらに別の例をあげて、修正会の最終夜である竟夜に翁舞が演じられたことなどを記している。服部、山路両氏の指摘から天台系寺院常行堂の修正会、修二会に演じられた芸能の場に、摩多羅神が翁として出現したという推測は可能であっても、鬼として出現したことはなかったといえよう。したがって、摩多羅神を鬼として出現させている、現行茨城のマダラ鬼神祭や京都太秦の牛祭

りは、大和猿楽者が伝説化したという「秦河勝より伝来の翁面と一体に観念される鬼面」という伝承を無視して理解することはできない。

次に、現在唯一の伝承である天台系寺院常行堂の修正会結願（最終日・竟夜）に行われている毛越寺延年における摩多羅神の顕現、および芸能について記してみよう。

三 岩手県西磐井郡平泉町 毛越寺の延年

1 毛越寺常行堂修正会延年の概要

岩手県平泉の医王山毛越寺金剛王院（本尊薬師如来）は、嘉祥三年（八五〇）に慈覚大師円仁の開山と伝えられ、奥州藤原氏によって造営された堂塔四〇宇、僧坊五〇〇を数える大伽藍であったが、度重なる戦火で全て失われた。現在、延年を伝承している常行堂も享保一三年（一七二八）に復興されたものであり、本尊は宝冠阿弥陀如来と四菩薩、奥殿に祀られているのが摩多羅神である。常行堂に伝承されている修正会の結願には、延年と称する古い芸能が伝承されており、天明五年（一七八五）正月二〇日に常行堂の摩多羅神祭を見た菅江真澄は、日記『かすむこまがた』にその様子を書き残している¹²。常行堂修正会としての法会は正月一日から始まり、二〇日に結願を迎えて、勤行作法の後に延年が行われている。結願の二〇日は、常行堂内部に雑華ぞうかと呼ばれる半紙の切り紙を注連縄につけたものを飾り、八百屋献膳という特殊な供物が本尊と摩多羅神に

供えられる。常行堂内部が荘厳されると、堂内では常行三昧供（初夜作法・後夜作法）が修され、その後に行われる延年の舞台となるのは、本尊が安置されている須弥壇前正面三間、奥行き二間の場所で、現在の演目次第は以下のようになっている。

- ① 呼立
- ② 田楽躍
- ③ 路舞（唐拍子）
- ④ 祝詞
- ⑤ 若女・禰宜
- ⑥ 老女
- ⑦ 児舞（一年交代で「花折」「王母ケ昔」）
- ⑧ 京殿舞（勅使舞）

しかし、時代とともに演目次第にも変化がみられ、文安六年（一四四九）に記されたという「常行堂大法会次第之事」には次のような次第が記されている。「路舞 延年舞（特に能をさす） 田楽躍 呼立 祝詞 老女舞 若女舞 禰宜舞 児舞 勅使舞 音楽 舞楽」¹³。山本ひろ子氏によれば、現行演目のうち摩多羅神に関係があると考えられる演目は、①呼立 ③路舞 ④祝詞であるという。¹⁴次に、この三演目について摩多羅神との関係を検証してみよう。

2 摩多羅神の顕現と芸能

①「呼立」は別称「笏拍子」とも呼ばれて、現在最初に行われる演目であり、二人の僧（五和尚・四和尚）が田楽衆に囲まれて向かい合って座し、かつて「足声」と呼ばれる秘事があったというが、現在は行われていない。その後、僧の一人が本尊の方向に向かって、「承仕 承仕、一和尚、二和尚、三和尚、其次々下流新入ニ至ル迄テ コクヘヤヘイラヘタヘト申セ」と呼びかける。昔はこれに答えて、王鼻面をつけた承仕が須弥壇側から出て「申ス 申ス 申

ス」と三度答えてすぐに引つ込み、「こく部屋」（現在はない）に一同が集まって酒宴を開催してから芸能が行われたという。承仕が呼びかける前に行われた「足声」は足を合わせる秘法で、「笏声」と呼ばれる笏拍子に合わせて「摩多羅神ハ（三反）時ヤヲ加フ仏カナマイレハ子カイミテ給フ」という歌がうたわれたという。¹⁵

③「路舞」は別称「唐拍子」とも呼ばれ、現行では田楽躍に登場する童子二人（シテテイ・ドウバツシ）が、田楽躍と同様の装束で笏を持ち、三人の僧が打つ田楽太鼓と六番で構成されている唐拍子歌（一番唐拍子Ⅱ「笏拍子」にうたわれているものは削除）に合わせて上の句で一人が、下の句でもう一人が立って交互に舞う。「唐拍子」は慈覚大師が入唐の折、清涼山の麓に二童子が出現して舞った様子を、当山常行三昧供修法の際に伝えたといわれている。この演目について、本田安次が「田楽躍」に付随したものであるという説明を加えたことよって、一般には現在でもそのように理解されている。¹⁶しかし、山本ひろ子氏は、「呼立Ⅱ」「笏拍子」「路舞Ⅱ」「唐拍子」というように、二演目は同様に「摩多羅神拍子」によって摩多羅神を囃すと同時に、衆僧（演者）に招集をかけるものと推測され、「笏拍子」が「こく部屋」への招集なら、「唐拍子」は芸能の場への招集であり、「路舞」の演者が二童子なのは、この二人が摩多羅神の二童子Ⅱ「丁礼多と儺子多であるという。また、「一番唐拍子」は「摩多羅神拍子」と呼ばれるもので、多武峰および日光の修正会でも歌われており、摩多羅神を讃え利生を仰ぐ歌であるが、問題なのは「二番唐拍子」で「ソヨヤミュ 是々レ々カ クスルサ々

ラ良ヤ ハシモソロ々ウヤ ヤラスハ ソ々ロ々ハ ソ々ロメニ
リ、心ナム ツクシニ□ソヨヤミュ 初返云云¹⁷ という意味不明
な文言で、これは丁礼多・彌子多の嘸し語であり、摩多羅神を本尊
とする玄旨帰命壇灌頂の周辺で流布したという。二童子相伝の呪文
めいた歌は修正会では歌われないものであり、「シ、リ」「ソ、ロ」
は性的な意味を含んだものであるという。¹⁸

④「祝詞」は鼻高・切り顎・茶色の翁面に三冬と称されている特
殊な冠をつけ、衣装はオレンジ色の上衣に浅黄色の切り袴、背後に
は桑の弓と蓬の矢を二本携え、右手に御幣、左手に数珠をかけて鳩
杖を持った主役が、上衣の裾を童子に取られ、後見の若い僧に先導
されて登場する。正面で後見が大日如来の印を結んで杖を支え、童
子は裾を持ったままうづくまる。この状態で主役は周囲には聞き取
れないように口中で祝詞を読み、祈祷の足拍子を踏んで弊を円を描
くように振り動かす。この役は、古来から常行堂別当である大乘院
とその分家だけが務めてきた重要なもので、この両者に差支えがあ
る場合は、一老が祝詞本を封印したまま仏前に供えるだけで終了し
てきた。祝詞の内容は摩多羅神の本地を解き、利生をあらわし、御
願円満、息災延命、千秋万歳を祈るものであるという。¹⁹

山本ひろ子氏は、先にあげた資料の中で摩多羅神に関する多くの
興味ある指摘をされておられるが、その中の一つに次のような記述
がある。中世、日光山常行堂修正会では、「呼立」の後、「摩多羅神
の御輿迎え」と称して摩多羅神の法体を宝殿から「こく部屋」へ移
動し、そこでさまざまな芸能を演じていた。しかし、毛越寺の延年

では「こく部屋」で芸能が行われなかった理由として、内陣で常行
三昧供が修されている間、摩多羅神の安置所である奥殿では、別当
大乘院の「唯授一人」という摩多羅神相伝が修されていたため、
「こく部屋」への出御はあるはずがなかったという。²⁰ 以上のような
記述によって、筆者は茨城県の「マダラ鬼神祭」に登場する六鬼神
が、背に負った鞆と矢および手にした弓という姿に、毛越寺延年の
「祝詞」に登場して祝詞を読み足拍子を踏む主役の姿を重ね合わせ
て考えたことが、見当はずれではなかったことを確信し、越寺延年
の「祝詞」に登場する翁は、摩多羅神の顕現であろうと推測した。

おわりに

筆者は先に、マダラ鬼神祭と牛祭りの共通点と差異点として五項
目をあげた。そこへ毛越寺延年の「祝詞」を組み込んでみたいと思
う。その前に、牛祭りで摩多羅神によって読まれる祭文と毛越寺延
年で読まれる祝詞について、本来の意味を理解しておきたい。祭文
は、祭儀の場に迎える神仏の由来や儀礼の過程などを盛り込んだ内
容に、独特の節付けをして読み上げるものであるが、本来は法会の
修法において祈祷願意を述べたもので、修験者の関与によって祭文
と呼ばれているという。²¹ 祝詞は、神を祀り神に祈願する際に神前で
唱える古体の文章で、古くは「のとのつと」などとも称した。祝
詞には祭儀の場に参集した人々に向かって宣読する形式と、神前に
向かって奏上する形式があり、前者は文章の末尾が「宣」で終わる

のに対して、後者は「申・白」で終了しているという。古くは、その基底に言霊信仰がみられ、神名を唱えることで神徳の発動を願ったという。²²次に、毛越寺延年の「祝詞」と樂法寺マダラ鬼神祭・広隆寺牛祭りとを比較してみよう。

① 摩多羅神が眷属を従えて祭場へ顕現する毛越寺延年の演目としては、「路舞」をあげておきたい。

② 寺院周辺に居住する在家住民による行列としては、毛越寺延年の前に「蘇民祭」の行列の練り込みが行われているが、蘇民祭の行列の中心は摩多羅神ではない。

③ 毛越寺延年の「祝詞」の主役（摩多羅神）が祭場へ顕現するのは、先導役の若僧と上衣の裾を持つ童子の二人であり、彼らを眷属（丁礼多・儺子多）に相当するものとして位置づけることもできる。

④ 延年で読まれる「祝詞」の内容は秘文とされて不明であるが、摩多羅神の本地を説き、利生をあらわし、御願円満、息災延命、千秋万歳を祈るものであるという。延年演目としての「祝詞」は最も重要な曲とされ、常行堂別当・大乘院だけが務めてきた役であり、口中に祝詞を唱えなが呪法としての足拍子（反閉）を踏む。

以上、マダラ鬼神祭・牛祭りに顕現する摩多羅神と延年「祝詞」に登場する主役には多少の違和感はあるが、多くの共通点を指摘することができる。さらに、延年の「祝詞」に使用されている翁面は、鼻高面である点を除けば切り顎であることから、猿楽の翁面を想定することができる。本来修正会の延年には、猿楽の「翁」が演

じられているはずであるが、毛越寺延年には「翁」が存在しない。

「祝詞」が「翁」に相当する演目として考えられる理由は、切り顎の鼻高翁面をつける他に、祝詞の内容が御願円満、息災延命、千秋万歳を祈るものであること、足拍子（反閉）を踏んでいることなどを上げることができる。広隆寺牛祭り小項目「2 大避大明神・秦河勝・摩多羅神・宿神・翁面（鬼面）」を思い出してみよう。樂法寺マダラ鬼神祭で、マダラ鬼神が眷属の鬼や地域住民による稚児・寺侍を引き連れて行列を練った後、本尊の前に至る。この行列は、宿神としてのマダラ鬼神が本尊（雨引観音）を祝福に来ると捉えることができ、この祭りを摩多羅神Ⅱ鬼Ⅱ宿神の祭りと考えることができる。次に広隆寺牛祭りは、地域住民と共に行列を練るという点でマダラ鬼神祭と同様であり、本尊の薬師如来を祝福に来る大避大明神Ⅱ秦河勝Ⅱ摩多羅神Ⅱ鬼（化け物面）Ⅱ宿神とみなすことができる。毛越寺延年「祝詞」の場合、摩多羅神が一山の総鎮守であることを考慮すると、本尊の阿弥陀如来を祝福に現われる摩多羅神Ⅱ翁（鬼）Ⅱ宿神と考えることも可能であろう。

最後に摩多羅神の演じる芸能について述べると、マダラ鬼神祭では眷属といっしょに護摩火のまわりで踊る鬼踊りであり、牛祭りでは参詣人から悪口をかけられながら、おどけた節でおどけた内容の祭文を読むことであり、延年の「祝詞」は、呪術的な足拍子と口中に唱える祝詞である。

本論執筆に際してご協力いただいた茨城県桜川市教育委員会の君島真理子氏・実践女子大学大学院学生の中本由有氏・樂法寺事務長

の宇留野聖澄氏、および写真を提供してくださった渡辺良正氏、萩原秀三郎氏、その他多くの方々にお礼申し上げます。

註

- 1 服部幸雄「後戸の神—藝能神信仰に関する一考察—」(『文学』一九七三年七月) P.16~27
- 2 服部幸雄「宿神論〈上〉—藝能信仰の根源に在るもの—」(『文学』一九七四年一〇月) P.64~79・「宿神論〈中〉」(『文学』一九七五年一月) P.54~63・「宿神論〈下〉」(『文学』一九七五年二月) P.76~97・「宿神論〈補訂—更級日記〉の「すくう神」をめぐる」(『文学』一九七五年六月) P.102~109
- 3 山本ひろ子「摩多羅神の姿態変換—修行・芸能・秘儀」(『大系 日本の歴史と芸能』第三巻 修正会・修二会・西方の春 一九九一年二月二五日 平凡社) P.115~166
- 4 寺崎大貴「雨引山楽法寺について」(『雨引山の絵画』楽法寺絵画資料調査報告書 平成一九年三月二五日 宗教法人 雨引山楽法寺) P.9~15
- 5 『全国寺院名鑑』(全日本仏教会・寺院名鑑刊行会編・発行 昭和四四年三月一日)、楽法寺発行パンフレット等
- 6 『茨城県の芸能史』(茨城文化団体連合会編 茨城文化団体連合・茨城県教育委員会 昭和五二年一〇月二五日) P.439~441、ほか
- 7 ちくま学芸文庫 新訂『都名所図会』二(市古夏生・鈴木健一校訂 一九九九年三月 筑摩書房) P.256~264
- 8 鈴木棠三『日本年中行事辞典』(角川書店 昭和五二年一月二〇日) P.591~592
- 9 服部幸雄「宿神論〈上〉」(『文学』一九七四年一〇) P.64~79
- 10 服部幸雄「宿神論〈下〉」(『文学』一九七五年二月) P.76~97
- 11 山路興造「翁と神事猿楽」(山路興造『翁の座—芸能民たちの中世』一九九〇年三月 平凡社) P.143~179
- 12 菅真澄(一七五四~一八二九)は江戸後期の旅行家で、民俗学の先駆者として知られている。三河の出身で本名を白井秀雄。国学・和歌・本草学を学び、信濃・東北・蝦夷地を遊歴し、津軽藩・秋田藩に滞在した。その紀行を『真澄遊覧記』という。
- 13 「毛越寺の延年の舞」(本田安次文・萩原秀三郎写真 昭和六一年一月一日 錦正社)
- 14 山本ひろ子「毛越寺の摩多羅神と芸能—「唐拍子」をめぐる」(別冊太陽「祭祀—神と人の饗宴」二〇〇六年一月一日 平凡社) P.52~58
- 15 榊泰純「摩多羅神と歌謡—修正会の延年—」(『日本仏教芸能史研究』昭和五五年二月二八日 風間書房) P.48~66
- 16 本田安次が、「路舞」は「田楽躍」に付随したものであるという説明をした理由は、全国各地に民俗芸能として伝承されている「田楽躍」には、「ろん舞」「入舞」「扇舞」などと呼ばれる舞が付加されていることによると考えられる。
- 17 註15に同じ。
- 18 註14に同じ。
- 19 註13に同じ。
- 20 註14に同じ。
- 21 『日本民俗大辞典』(一九九九年一〇月一日 吉川弘文館)
- 22 註21に同じ。



楽法寺 マダラ鬼神祭「野天護摩場のマダラ鬼神」(平成20年4月13日 筆者撮影)



京都太秦広隆寺「牛祭り」の行列
牛に乗った摩多羅神(日本写真家協会会員渡辺良正氏撮影)



毛越寺延年「祝詞」(「毛越寺の延年の舞」本田安次文・萩原秀三郎写真 昭和61年1月1日 錦正社)による